

カドワースにおける人間論

竹 中 真 也

はじめに

本稿は、ケンブリッジ・プラトン主義者の一人カドワースにおける人間の生命、知性、情念、さらにはそれらにかかわる魂の働きを概観し、カドワース哲学での人間のありかた、さらにはその歴史的意義をあきらかにする。そのさい注目するキーワードは、「形成的自然」（第一節）、「知性的活動」（第二節）、「愛」（第三節）である。これらをつうじて、カドワースが当時の時代状況においていかなる立場を目指し、またそれがのちの時代にいかなる点でつながりうるのかを探ってみたい。

第一節 「形成的自然」について

一七世紀において本格的に展開された古代原子論の復活は、哲学者たちにも多大な影響を与えていた。デカルトは、思惟実体と延長実体を峻別し、自然現象（物理現象や動物の仕組み）を延長実体から、ひいてはその最小単位の粒子から説明していた。しかし、原子論を徹底したのはホップズである。彼は自然現象どころか心的事象さえ原子の運動に還元し、徹底した唯物論的立場を打ち出していたからである。こうして、原子論の本格化は唯物論への道をひらき、

人間観や生物観はおおきな変更を迫られた⁽¹⁾。

しかし、こうした唯物論の隆盛に対抗した勢力もいた。原子論の成果を一定程度認めながらも、カドワースやモアは魂の存在を依然として残そうとしたのである。彼らは、生命現象に着目し、生命ないし魂の存在を認めていた。彼らの議論は、おもに古典研究をよりどころとしたものであった。ここでの古典研究はきわめて広範な時代の文献を渉猟したものである。カドワースが研究したのは、プラトンやアリストテレスといった古代ギリシアの思想にとどまらず、プロティノスやプロクロスなどの新プラトン主義者や、ストア派やエピクロス派、オリゲネス、アウグスティヌス、トマス、ボナベントゥラ、フィチーノ、ピコなど多岐にわたる。これらの哲学者たちの文献研究の成果のひとつが、魂の存在を裏づける「形成的自然」である。まずは、自然全体がいかなるものかを見て、「形成的自然」をそのうちに位置づけたい。

さて、カドワースは、自然世界ひいては宇宙全体について浩瀚な著作『宇宙の真的知的体系』を残した。この著作においては、宇宙全体のありかたが以下のように論じられている。

…存在には明らかに尺度や梯子があり⁽²⁾、事物の秩序は疑いなく、下降するしかたで、より高い完全性からより低い完全性へと向かったのである。しかるに、この梯子の最下段、最底段、あるいは一番下の横木の部分が、生命と知性をまったく欠いた愚かで感覺能力のない物質であり、この梯子の最上段、最高段、そして頂上は、自己自身、すなわち事物のあらゆる可能性を把握する完全な全能の存在者である。完全な知性的存在は、実体の尺度の始まりであり、頂点である。そこから事物は徐々に下へとますます低いところに降りていき、感覺能力のない物質で終わる。(TIS 3, 440-441)

基本的には新プラトン主義の流出説に依拠しながら、カドワースは宇宙論を展開している。一者から知性へ、知性から魂へ、魂から質料へという流れが念頭におかれている。そのさい、まったき受動状態で思考しないものが最下層

に、純粋な能動性（完全現実態）のもと思考するものが最上層に存在する。つまり物質と神が両端に位置し、そのあいだには完全性の度合いの異なる存在がグラデーションをなして存在する（TIS 3, 440; Hutton 2017, 469-472）。

物質と神には生まれた全体的構図において、植物、動物、人間、天使、悪魔などの他のすべての存在はおのおのの位置を占めることになる。とはいえそのうち、物質と生命あるものは対比的であり、生命の原理のうち、もつとも低い地位にあるのが「形成的自然（Plastic Nature）」である。

「形成的自然」は、生命としては最下層にあるものの、生物を生物たらしめる生命の原理で、生命であるかぎりでは非物理的である（TIS 1, 252）⁽³⁾。「形成的自然」は、動物の体においては、眼や耳、手や足、静脈や動脈、神経や筋肉を同じ力で形成するのみならず、それらの諸部分が有機的な連関をもつように統一して調節している⁽⁴⁾。このようにして、まさに動物の体を作り保つのが「特殊的形成的自然」である。そして同じようにして、物体的宇宙全体にも諸部分を作り、それらを統一するものがあり、それが「一般的形成的自然」（TIS 1, 260-283）である。というのも、全体を統一的に形成しているものがなければ、宇宙全体が均一な秩序と調和をもつことはありえないからである。こうして、動物の体における「特殊的形成的自然」と物体的宇宙全体における「一般的形成的自然」は、その相似性から、「ミクロコスモス」と「マクロコスモス」として規定されることになる（TIS 1, 260）⁽⁵⁾。

とはいえ、「形成的自然」はみずからの活動の目的を認識していない。この意味で、「形成的自然」は盲目的であって、主人に命令を与えられた召使のように、知性に命じられた作業を肅々とこなすのみである。別の言い方をすれば、「形成的自然」はそれ自体では無意識的であり、生命の本能的活動とも呼ぶことができる。われわれ人間もこうした生命の本能的活動を前提にして生活し行為する（まばたき、呼吸、心臓や胃腸などの運動、怪我からの回復や、歯の再生など）。感覚的な経験が可能になるのも、「形成的自然」のおかげである（そもそも生きていなければ、感覚経験ができないから）。しかしながら、人間にはそれらよりも高次の知性認識がある。それはのちに発見された遺稿『永遠で不動の道徳論』において主題的に論じられている。つぎに、その議論の要点を確認しておこう。

第二節 「知性的活動」について

カドワースがこの遺稿において試みたのは、道徳の相對主義や主意主義を批判し、道徳的知識の普遍性を基礎づけることである。そうするにあたってカドワースは、われわれの知的活動がいかなる性質のものであるかを提示している。カドワースによると、認識には「感覺知覚 (sense perception)」と「知性認識 (intellection)」の二種類がある。感覺は物体 (原子) の運動を受動的に受けとることで生じ、魂の受動的部分がかわる。しかし感覺にかかわる魂は、その対象が何であるかという理拠 (rationes) や本質 (essences) や真理 (truth) をあきらかにはできない。この意味で、感覺は「混乱した (confused)」ものである。これにたいして、感覺知覚を機縁として、魂は能動的活動 (activity) をおこない始める。これによって真なる知識、普遍的知識がもたらされるのである。

しかし能動的活動は、個別的な感覺を抽象することによって普遍概念を手に入れるわけではない。知性認識は、みずからよりも完全な存在のうち先に存在する觀念つまりはイデアにアクセスすることによって成立する。カドワースにとって、事物の觀念 (イデア) はその認識よりも先に存在しており、このような事物の先在する觀念は「先取觀念 (anticipation)」と呼ばれる (カドワースはストア派用語の *prolepsis* の訳として、この語をもちいている)。この觀念を神が思考して保持しているところに、われわれの魂が触れることで、普遍的知識が得られることになる。とはいえ、先取觀念を把握するにさいして、われわれは不完全であるがゆえに、少しずつ推論し試行錯誤していくしかない。このとき、神の精神における原型の模造しか手にできない。この点は、以下のように説明される。

さて、不完全なものはずべて、同じ種類の完全なものに依存しなければならぬので、以下のようなことになる。すなわち、われわれの個別的で不完全な知性は、そのうちにじつさいに事物の理拠やその真理をかならずしも含んでいるわけではない。その知性は、多くの場合、無知であり、疑い、誤るのであって、議論し推論することに

よって、あるひとつのことから別のことへとゆっくりと進んでいくのである。したがって、その「人間の不完全な」知性は、完全に、無限で、永遠の知性〔神の知性〕を派生的に分有しているにちがいない。(EM 4:11.)

同一の原型からは多なる模造が生まれる。それがわれわれの知性認識の対象である。ちようど同一の事物が、ガラスの歪みやその置かれた位置に応じて、おのおの映し出されるように(EM 1:3.7)、われわれは同一の知性内容を個々別々の観点で映し出している。このように、われわれの知性が努力しなければ、普遍的知識など得られないのであり、しかも、模造しかもてないのなら、真理を発見したと僭称することは独断となる。この点で、カドワースは知の唯一性を神に求めながらも、われわれの知性に神の知へと近づける余地を残していると思われる。

さて、いずれにせよ、われわれの魂の能動的活動を神の能動的活動と一致させることによって、われわれは普遍的知識にアクセスするとともに、神的性質を分有することになる。したがって『永遠で不動の道徳論』におけるカドワースの立場からすれば、正義、誠実、知恵、美德等々には普遍的な原型があり、われわれの理性ないし知性が活動するとき、限定され具体化されつつも、その原型と一致することが知性認識なのである(6)。

しかし、カドワースが残した説教や自由意志をめぐる草稿群からは、『永遠で不動の道徳論』の立場とは異なる観点の議論が見受けられる(7)。例えば、カドワースは以下のように言う。「もし徳を得るために必要なことが、善と幸福の本性に関する学問によって、人間の思弁的知性を教育することにほかならないとすれば、心のうちの知性が納得すれば、すべての徳は一瞬にして身につけられるだろう」(MS 4982, 10)。これは、そうしたことはほとんどないだろうという反語である。あるいは、カルダスが草稿から示すように、「善と悪の尺度は……知性の思弁的知識ではなく、同じものにたいする好ましいものと好ましくないものへの生命的な本能や欲望、内的な趣味や嗜好(vital instincts and appetites and inward tastes and relishes)である」(Kaldas 2019, 175)。こうした善悪をかきわけける本能にかかわる言葉が、草稿において何度も書き連ねられるのである。

このようにカドワースは、思弁的知性ではなく、生命的本能に善と悪を見分ける力があると論じたが、この本能こ

そが道徳的実践の動機づけの原理となる。それでは、この善悪の動機となる本能とはいかなるものか。それについてつきに見てみよう。

第三節 情念としての「愛」

カドワースの立場は、『永遠で不動の道徳論』における知性認識の議論を強調することで、以前には主知主義的なものと評価されていた。しかしバスマアの画期的な研究を先駆けとして、カドワースの遺稿研究が進み、既存の評価を改める必要が出てきた。それはとりわけ『自由意志論』に基づいたものであり、その遺稿では、倫理的行為への動機ないし動因が説かれている。本節では、カドワースの自由意志論におけるその関連個所を、先行研究をもちいて概観する。そのさい、超知性的本能、愛、自由意志といった概念を明確に整理しているリーチ (Leech 2017a) の研究をとくに参照しよう。

さて、リーチによれば、善悪を見分ける本能は、カドワースにおいて情動 (passion) ないし愛 (love) などと呼ばれる。ここでの愛とは傾向性 (inclination) あるいは本能 (instinct) と理解してよい。愛はおおきく三つに分けられる。以下では、リーチの文言を最初に示し、「」で内容を補足していくことにする。

〈超知性的愛〉

- (1) 神の「永遠で、自己発生の、知的な愛……〔それは〕不公平でないしかたで自分自身を分配する」(TIS1, 317)。⁷「無限の活動の愛」(TIS 2, 394) は、神のまさに本質であると同時に、被造的宇宙の秩序原理でもある。「この愛は神のみにふさわしいもので、あらゆる被造物にたいして公平に与えられている。」(傍線の強調は引用者による)

(2) 人間の優れた動機づけ本能で、(1)を分有した類似物 (participated likeness) であり (TIS 2, 216) 人間の「最高の完成」であると同時に道徳の源でもある。「この愛は本来、キリストにのみ帰されるが、通常の人間にも見いだされるものである。これが、善悪を区別する本能である。パスモアの言葉を借りれば「優れた愛 (superior love)」(Passmore 1951, 56) とも呼ばれる。カドワースはこの愛を「優れた理性 (superior reason)」とも言いかえている。「優れた理性」は、実際には人間の魂が神の善に有限なしかたで参与することであり、それは「誠実さの善」(MS 4980, 59) を追求する動機づけとなる。したがって、カドワースは「優れた理性」をしばしば「正直さや良心の命令」と呼んでゐる (MS 4978, 25; TFW 166) (80) (81)

〈欲望の愛〉

(3) 「妬みを生むような」、心の狭い、狭量な利己主義」(TIS 3, 489)「すなわち、本来悪いわけではないが、抑えておく必要のある低次の動機づけの本能が含まれる。〔ここでの欲望の愛は「劣った理性」(inferior reason) (MS 4979, 5) とも呼ばれるものである。「劣った理性」(8) は、より長期的な自己利益のためにもちいられるので、狡知とも言えるだろう。それは現在と未来の利益を比較考量する。なお、ここでの自己利益には、持続する単純で肉体的な快楽から名誉や知識などのより洗練された快楽まで、質的に異なる多くの種類の快楽が含まれる (MS 4978, 41-42; TFW 173-174) 〕。この種の快には長期的観点や計算が含まれる点で、利他的快とは区別される(82) 〕

これら(1)(2)(3)のうち、人間にかかわる愛は(2)と(3)であるが、これらはいずれも受動的に与えられた生得的傾向性である点では同様である。しかし、(2)「優れた理性」が発現するさいには(3)「欲望」とは別種の「快楽」や「喜び」が生じる。したがってそれぞれ別の愛ないし傾向性であると言ふことができる。

さて、人間の魂にこうした別々の本能があるからといって、人間はただちに(2)「超知性的愛」に基づく善をお

こなうわけではない。というのも、この本能はあくまで素質だからである。つまり、ここまでは、ある種の喜びを味わう(2)や(3)の愛ないし傾向性が人間にそなわることを述べているだけである。したがって、それらの本能が発揮されるには、それを実際に傾かせる「力」が伴わなければならない。(3)の欲望のばあいには努力を要しないだろう。じつさいわれわれは空腹になればおのずと食事をとり、疲労で眠くなればベッドに行くだろうからである。しかし楽園追放後の墮落した人間にとって(2)を動機づけるのは容易ではない。「超知性的愛」のめざす善は魅惑するにとどまり、「穏やかで、やさしいが、黄金の魅力」(MS 4982, 22)をただよわせるだけである。したがってその愛を働かせるにはわれわれが努力し、みずからをその愛にふりむける必要がある。しかしこのとき、(2)の愛ないし傾向性を発現させるには、三つの力の協力が必要となる。それが、自由意志とふたつの恵みである。

カドワースによると、「超知性的愛」の対象である「神的生活」を実現するためには、自由意志をそちらに向かわせる必要がある。しかしながら、カドワースは伝統的な神学に基づいて、自由意志をもちいて努力するだけでは墮落後の人間は善行に至りえないと考えている。善行に至るためにはふたつの恵みの力が付加されることが必要だからである。それは遺稿において以下のように並べて論じられている。

(一) 第一に自然本性的なもので、これは共通の恵み (common grace) を意味する。というのも、もし自然における神がわれわれのうちに、神的火 (to theion) を分有したものを植えつけなかったならば、聖性と道義は暴力的〔外から押しつけられてしまい〕で超自然的なものであり、結果的にまったく善ではなかっただろうからである。〔道徳的な善は外から強制されるものではない。〕

(二) 第二に、低次の欲求の活力と衝動を表出したり、より高次の原理に向かって積極的にみずからを押し出したりするために必要な、われわれ自身の自己活動的な意欲がある……。〔これは自由意志である。〕

(三) 第三に、われわれの努力を……効果的にするための特別な恵みの助けがある。(MS 4980, 83)

リーチによれば、(二)でカドワースは、(一)と(三)に関して、ペトルルス・ロンバルドゥスの「一般的な恵み (*gratia generalis*)」と「特別の恵み (*gratia specialis*)」の区別に従っており、(一)はすべての人間に与えられた純粹に自然な被造物の能力 (恵み) であり、知的本能を含んでいる。これにたいして、(三)は超自然的な内的恵みであり、神の摂理の特別な働き (これは神の力が人間の魂に働くこととして経験される) によって、人間がみずからの墮落と闘うことをときおり「個々特別に (*specialis*)」援助するものである。これらに挟まれた状態で、カドワースは自由意志をあえて提示している。こうした三つが論じられた背景にあるのは、カルヴァン主義者やペラギウス主義者への対抗措置である。カルヴァン主義者は (三) のみを高く評価して運命論に陥っている。他方で (一)、(二) のみを強調して自力救済を説くのがペラギウス主義である。これらにたいして (一)、(二)、(三) の力が協働するのがカドワースの立場になる (Leech 2017a, 959)。とはいえ、これらの (一) と (三) は外から押しつけられるわけではない。

恵みは、われわれ自身の「意志の」努力に勝り、われわれなしにすべての働きをすと理解されるべきではない。このような恵みも、善と呼ばれるものを、魂にとってたんなる外的で外在的・外来的なものにしてしまう。つまりそうした恵みは、善を、外から強制的に押しつけられただけのものとして、真に自分のものでも自分自身でもないものとしてしまうことになる。それゆえに、恵みはある意味で自分自身から湧き出てくるものでなければならぬ。(MS 4980, 83)

(二) の愛の実現を外的な恵みのみに帰する運命論も、自力で救済をおこなえる立場もともに否定し、神と人が協働することで、善性を回復して神化を果たすが、カドワースの立場である。つまり (一) の自然の恵みは原罪によって覆い隠されているので、永遠不変の性質を回復させるために (二) 自由意志が必要であり、(二) を支えるため

に(三)特別の恵みが必要とされる(Leech 2017a, 958)。つまり、自由意志は内なる恵みの助けのもとで働いて、超知性的愛を実現させるのである。

第四節 カドワースにおける人間

それでは、これまで見た形成的自然と、知性認識と、愛(とりわけ「優れた理性」)はいかなる関係にあるのか。本節では、以上の概念をふりかえりつつ、この問いに答えてみよう。

まず、形成的自然は、諸個体の無意識的な生命活動の原理であり、例えば諸部分の形成や個体全体の統一を担うものであった。これには、まばたき、呼吸、心臓の運動、怪我からの回復、習慣的行為などが含まれている。したがって「形成的自然」は、生命の維持を担うものである以上、動物的欲求とも関与するとも言えるだろう。また「形成的自然」は個別の生命体にかかわるばあいには「特殊的形成的自然」と呼ばれるが、自然全体についても、カドワースは同様に諸部分を形成し、全体を統合する「一般的形成的自然」を想定していた。

他方で、カドワースは『永遠で不動の道徳論』において、知性認識に基づく不変的な「理拠」や「本質」の認識論的な機序を論じ、知性的認識の対象は神のうちのイデアの「派生的分有」であるとしたり。そのさい、神の認識活動に人間の認識活動を限定的ながらも一致させることで、人間は、神のイデアを原型とした模造を認識するのであった。このとき、道徳的な正しさや善を認識することは、それが知性認識である以上、矛盾を含まない。この意味では、道徳的な善には、矛盾の排除という特徴がある。

これにたいして、自由意志をめぐる草稿においては、書物を研究する学問では真に道徳的になることができず、情念つまりは愛という本能を発現するように自由意志をふりむけることが論じられていた。とはいえ神的生活を選ぶには、「一般的な恵み」と「特別な恵み」の助力が必要であった。これらはあらかじめわれわれのうちに埋め込まれたものであり、この助力は外部からでなく、自分から生じるものだった。というのも、さもなければ、人間の善行や回

心が、他者や外からの暴力的強制になってしまふからである。道德的善は、みずからの意志で善を選ぶことに存しており、たとえ霊の働きであれ、外部から来るものは人間の善の選択つまりは道德性を損なう結果になる。こうして運命論にも自力救済にも陥らず、人と神の協働をカドワースは提示したのである。

このようにふりかえるとき、「特殊の形成的自然」による動物的欲求、普遍的対象の知性認識、愛という情念は、たしかに異なる人間の存在の様相である。そこでこれらのうちいずれが先かと問うことも可能ではある。しかし、そうした問い自体、人間の生命や魂の諸能力を分離し抽象することであり、これはカドワースが否定するものである。彼は人間の魂を「ヘゲモニコン」(TFW 178)と呼び、一なるものや自己自身とみなしているからである。ハットンの整理を参照するなら、心の能力には少なくとも以下のようなものがある (Hutton 2017, 477)。

- ① 知覚や欲望や欲求・外界の対象物にたいする感覚的知覚、身体的な喜びや痛み、突発的な空想や恐怖、食欲や情念など＝動物的欲求
- ② 実践的理性・個人的な使用の自由な理性＝「劣った理性」
- ③ 良心・誠実さからの優れた命令＝「優れた理性」
- ④ 知性・自然界に存在するものとしめないものや、普遍的な事物の真偽を観想する思弁的能力＝知性認識
- ⑤ 判断力または意志決定＝「熟慮し選択する能力」＝自由意志

こうした心の諸能力があるとき、いずれを優先すべきかはわれわれの自由意志次第であるにしても、どの活動も他の活動を伴い、単独で活動することはない。神に向かう愛という情念を燃やしながらも知性的活動をおこなうこともあれば⁽¹⁾、動物的欲求に抗しながら知性認識へと向かうこともあるだろう。これらのいずれも切り離さない多種多様な力の乱流が人間の心のありかただとするのが、カドワースの人間論である。とすれば、知なき熱狂、言葉だけを墨守する教条主義、ドグマをふりかざす独断主義ほど、カドワースの人間観からほど遠いものはない。これらは、一

部の能力だけを働かせ、あるところで安住し、他者に不寛容な態度をとるのであって、人間の能力が不完全で多様な力の奔流であることを忘れている。カドワースあるいはケンブリッジ・プラトン主義者には「広さ (latitude)」があると言われるとき、これは、疑い迷いながらも実践し探究を続けざるをえない人間のありかたを正面から見据えた結果なのである。

むすびとして

原子論や、唯物論的運命論や、予定説という、さまざまな方面の動向にたいして、カドワースはみずから理論武装し対抗していた。魂の存在 (形成的自然)、知性による認識論、超知性的愛という情念、自由意志と恵みの神学的議論は、同時代のさまざまな思想の台頭という時代的課題に応じるという目的で展開されたものである。たしかに、カドワースの立論は、伝統的神学においてに依拠するところがあるし、生命活動、知性認識、愛は、神による創造や設計とのかかわりを抜きに語ることはできない。われわれの知情意は、神によってある方向へとセッティングされた状態で存在しているとも言える。さらに、(2)の愛ないし「超知性的本能」を発現させるためには、自由意志にはふたつの恵みがなければならないのだった。この意味で、カドワースにおける人間は、いつけんすると、「救済」へと容易に赴けるように仕組まれているとさえ思われるかもしれない。

しかし、すでに見たように、墮落後の魂には、自己利益のみをひたすら追究するような利己主義的な傾向性 (3)の欲望)もまた含まれている。とすれば、われわれはそれほど容易に善行をなすという方向に向かうわけではないだろう。利己主義的な方向へと向かうのか、それとも、愛 (2)という他者へと開かれた情念を發揮することへと向かうのかの決定は、われわれの意志にこそかかっている。とすれば、倫理的善の決断が、われわれの内なる自由意志 (二)にかかっているという意味で、これは、のちのカントの「自律」を準備しているとも言えることができるのではないか (もちろん両者の背景となる概念装置が大きく異なる点については考慮しなければならないとはいえ)。

*カドワースの文献は、『宇宙の真の知的体系』については、Cudworth, R. (1678). *The True Intellectual System of the Universe: Wherein All the Reason and Philosophy of Atheism is Confuted, and Its Impossibility Demonstrated, with a Treatise Concerning Eternal and Immutable Morality, to which are added the Notes and Dissertations of Dr. J. L. Moshem, translated by J. Harrison* 3vols. London, Printed for T. Tegg, 1845 をみよ。また、『永遠で不動の道徳に関する論考』と『自由意志論』は次の著作を使用した。Cudworth, R. (1731). *A Treatise Concerning Eternal and Immutable Morality, and a Treatise of Freewill*, edited by S. Hutton. Cambridge: Cambridge University Press, 1996. なお、カドワースの遺稿についてはケンブリッジ大学のウェブサイトにおける The Cambridge Platonism Sourcebook を参照した (<http://www.cambridge-platonism-divinity.cam.ac.uk/texts/results?document-type=printed&author=cudworth,%20ralph>)。引用のよみには、『宇宙の真の知的体系』の場合には、全集の巻数とページ番号を、『永遠で不動の道徳に関する論考』の方は、巻数と章数と節数を書いた。『自由意志論』はページ番号、カドワースの遺稿については、manuscript 数と頁番号を記した。また、慣例に従い、以下のような略記号を用いた。

『宇宙の真の知的体系』：TIS
『永遠で不動の道徳に関する論考』：EIM
『自由意志論』：TFW
『カドワース遺稿』：MS

〔付記〕

本研究は、二〇一九年度～二〇二一年度科学研究費補助金若手研究「イギリスのプラトン主義の系譜―パークリとケンブリッジ・プラトニストの比較研究」(課題番号 19K12972) 研究代表者：竹中真也)の成果の一部である。

注

- (1) 唯物論への対抗策として形成的自然が用いられた点は Hunter 1950, 200 を参照。
- (2) ボエティウスからの強い影響があることは Hutton 1997 において詳しい。
- (3) この点は原文では以下のように言われている。

カドワースにおける人間論(竹中)

形成的自然は生命のもっとも下位のものではあるが、それは生命であるかぎりでは非物的でなければならぬ。生命はすべてそうだからである。というのも、物体〔身体〕は、受動的な能力とともに、固い延長ないし抵抗する嵩、たんなる外的表面、他の外（*alind extra alind*）をもつにすぎないので、それに属する内的なエネルギー、自己活動または生命を有していないからである。身体は自分自身を動かすことさえできないのであり、そうであるがゆえに、ましてや技巧をこらして自分自身の運動を指示することもできないのである。さらに、動物の体の形成においては、全体を方向つけるのは、ひとつの同じものである。目を考察し形成するのは、耳を形成するものと別個のものであることはありえない。また、手を作るものと足を作るものも別物ではありえない。静脈を形成するのと同じものが、動脈も形成しなければならぬ。また、神経を作り出すものは、筋肉や関節を作り出すものでなければならぬ。ひとつの自己同一のものが、有機体全体の観念と完全な型または土台をもっていなければならぬのである。というのも、たがいに離れたところにある物質のいくつかの部分は、共通の命令なしには、単独で作用してしまい、協力することも、たがいに連絡をとることもできないので、すべての動物の体のように均一で秩序ある一つのシステムまたは複雑な構造を構成するように協力することはできないからである。（TIS 1, 252）

(4) 「形成的自然」の働きの例としては他にも以下のようなものがある。まばたき、呼吸、心臓や胃腸などの運動、蜘蛛や蜂が巣を作るような本能的活動や、怪我からの回復や、菌の再生や、睡眠や食事による健康の回復などである（Hutton 2017, 475）。あるいは、習慣に基づいて音楽家が演奏し踊り子が舞うときの指や足の動きがあげられる。習慣はこの形成的自然による。そしてそれは眠っている間も失われることはない。

われわれの人間の魂それ自体が、みずからがもつものをつねに意識しているわけではないこととはたしかである。眠っている幾何学者も、自分の幾何学的な定理と知識のすべてをそのときに何らかのしかたでもっているし、眠っている音楽家も自分の音楽の技術と歌のすべてをもっている。したがって同様にして、魂が、表立っては意識していない何らかの活動をみずからのうちで実際にしていることが、なにゆえありえないだろうか。（TIS 1, 247）

(5) カドワースは、ルネサンス期の哲学から影響を受けているが、たんにそれを受け入れたのではない。パスモアによれば、彼

は古い哲学的伝統と新しい科学の最初の調停者である (Passmore 1951, 18)。

(6) 神とわれわれの精神がともに普遍を認識するさいに能動的活動であることについては、以下のような発言もある。

事物について必然的に存在する永遠の理法 (rationes)、本質、真理があると肯定すること、無限で全能で永遠の精神が必然的に存在し、つねに自分自身や、万物の本質や、それらの真理を現に「現実態において」(actually)理解していると行うことは同じことである。いや、むしろ、その無限で全能で永遠の精神こそが、万物の理法、本質、真理なのである。というのも、事物の理趣や本質は、彫像や、世界のどこかでそれだけで吊るされている多くの肖像や絵画のように、死んだものではないからである。真理もまた、本の上にインクで書かれたたんなる文章や命題ではない。それらは生きたものであり、精神や知性の状態にほかならないのである。したがって、第一知性は本質的かつ原型というありかたで、すべてのものの理法や真理であり、あらゆる個別的で創造された知性は、それ(第一知性)を派生的に分有したものにすぎないし、それらは模造的な同じ特徴を押し印されているのである。(EIM 447, 傍線の強調は引用者)

(7) カドワースにとって善と悪の区別は、思弁的知性によるのではなく、善を好み悪を避ける本能に基づいている点は Darvall 1995, 128-30; Leech 2017a; Passmore 1951, 51-67 も強調する。

(8) 「優れた理性」の説明については、Leisinger 2019, 654 も参照。

(9) (2) の愛は、カドワースの遺稿においてさまざまに言い換えられている。「超合理的で超知性的な本能 (a Superrational & Superintellektuell Instinct)」(MS 4982, 8)、「生命的な知性の本能」[「……優れた知的な生命的原理」(MS 4982, 19-20)、「生命的で知性的な本能」あるいは「神的生命的分有 (a Virall intellektuell instinkt or a partisipation of the divine life)」(MS 4982, 21)とも言い換えられている。ダーウォールによれば、カドワースは「優れた理性」「知的本能」「愛」という言葉を互換的に扱っている (Darvall 1995, 144)。

(10) ついでに「劣った理性」については Leisinger 2019, 654 に詳しく。

(11) この点は、Darvall 1995, 144 で指摘されている。ダーウォールは、Passmore が動物的欲望と劣った理性の区別をしておらず、それに疑問を呈している。

(12) そのさい、注意すべきだが、この愛は知性認識と相いれないわけではない。愛という情念が向かう先の他者をおもう行為は、

事物の理拠なしにはおこなわれえない。この意味で、知性認識の内容は、愛と矛盾しない。(うそをつかない誠実なるまいは、うそについての知性認識を含んで成立するからである。) 超知性的な愛は、不合理であるわけではない。それは知性認識を受け入れることができる。

やや文脈が変わるが、例えば、神における(ひいては人間が目指すべき)永遠不動の正義や不正義があることは確かである。この点をカドワースは論じている。

こんなこと〔例えば四角形の本性を円の本性に変える〕は最も明白に矛盾を含意しており、矛盾するものの共存はあらゆる知識と事物の明確な本性(すなわち理拠)や思念を破壊してしまう。いや、矛盾を含意するものは存在しないのであり、それゆえ神の力の対象とはなりえない。そしてこの理由は、正義や不正義のような他のすべての物事についても同じである。というのも、いかなるものも、それ自身の本性の必然性によって、不動のものであるからである。(EIM 1. 3. 4.)

(ここで言われるように、正義と不正義には永遠で不動の概念が関与するのであり、こうした概念はけっして上述の超知性的愛を排除しないし、超知性的愛のほうも、こうした概念を排除しない。)

参考文献

- Carré, M.H. (1953). 'Ralph Cudworth', *The Philosophical Quarterly*, Vol. 3, No. 13, pp. 342-351.
 Darwall, S. (1995). *The British Moralists and the Internal 'Ought': 1640-1740*, Cambridge University Press.
 Gill, M.B. (2004). 'Rationalism, Sentimentalism, and Ralph Cudworth', *Hume Studies*, Vol. 30, No. 1, pp. 149-181.
 Hedley, D. (2019). 'Ralph Cudworth as Interpreter of Plotinus', in *Plotinus' Legacy: The Transformation of Platonism from the Renaissance to the Modern Era*, ed. by Stephen Gersh, Cambridge University Press, pp. 146-159.
 Hunter, W. B. Jr. (1950). 'The Seventeenth Century Doctrine of Plastic Nature', *The Harvard Theological Review*, Vol. 43, No. 3, pp. 197-213.
 Hutton, S. (1997). 'Cudworth, Boethius and the Scale of Nature', in *The Cambridge Platonists in Philosophical Context* Pol-

- tics *Metaphysics and Religion*, ed. by G. A. J. Rogers, J. M. Vienne, Y. C. Zarka, pp. 93-100.
- (2012). 'From Cudworth to Hume: Cambridge Platonism and the Scottish Enlightenment', *Canadian Journal of Philosophy*, Vol. 42, No. S1, pp. 8-26.
- (2017). 'Salving the Phenomena of Mind: Energy, Hegemonikon, and Sympathy in Cudworth', *British Journal for the History of Philosophy*, Vol. 25, No. 3, pp. 465-486.
- Kaldas, S. M. (2019). 'Reason, Sentiment, and Autonomy in The Moral Philosophy of Ralph Cudworth', *History of Philosophy Quarterly*, Vol. 36, No. 2, pp. 161-180.
- Leech, D. (2017a). 'Cudworth on Superintellectual Instinct as Inclination to the Good', *British Journal for the History of Philosophy*, 25 (5), pp. 954-970.
- (2017b). 'The Concept of Grace in Ralph Cudworth's Unpublished Freewill Manuscripts', *Studies in the History of Philosophy* [online], 15 October 2017, T. 8, nr 3, s. 25-43. [accessed 25.2.2022]. DOI 10.12775/szht.2017.030.
- Leisinger, M. A. (2019). 'The Inner Work of Liberty: Cudworth on Desire and Attention', *International Journal of Philosophical Studies*, Vol. 27, No. 5, pp. 649-667.
- Passmore, J. A. (1951). *Ralph Cudworth, An Interpretation*, Cambridge.
- Stancu, D. (2005). 'Rational Religion and Toleration: Ralph Cudworth and other Platonists', *Studia Politica: Romanian Political Science Review*, 5 (4), pp. 849-863.
- 三上章 (二〇一七)『ケンブリッジ・プラトニストの哲学的靈性—スミス、ウイチカット、カドワースの説教・講話に通底する特質—』リットン。
- カッシーラー・E (一九九三)『英国のプラトニルネサンスケンブリッジ学派の思想潮流』花田圭介監修、三井礼子訳、工作舎。
- コプラストン・F (一九七〇)『中世哲学史』箕輪秀二、柏木英彦訳、創文社。
- シュナイウィンド・J・B (二〇一七)『自律の創成：近代道徳哲学史』田中秀夫、逸見修二訳、法政大学出版局。
- マレンボン・J (一九八九)『後期中世の哲学 1150-1350』加藤雅人訳、勁草書房。
- ロング・A・A (二〇〇三)『ヘレニズム哲学—ストア派、エピクロス派、懐疑派』金山弥平訳、京都大学学術出版会。